

# 消滅の危機に瀕する邵陽県平話の初歩的研究

王 振宇

## アブストラクト

邵陽県平話は中国湖南省邵陽県の長陽鋪鎮、岩口鋪鎮などの地域に分布している方言である。現在、この方言を自由に操れる話者が主に 70 歳以上の高年者のみであり、消滅の危機が極めて高い。邵陽県平話については、これまで『邵陽県志』における単語の挙例しかなく、詳しい記述的研究が一切なされていない。筆者は岩口鋪鎮で調査を行った結果、湘方言に見られない多くの特徴的な言語現象を邵陽県平話が有していることが分かった。本稿は邵陽県平話に関するこれまでの研究上の空白を埋めることを目的とし、音韻上の特徴的な現象をいくつかまとめる。

キーワード：危機言語、平話、邵陽県平話、湘南土話、湘語

## 1. はじめに

筆者はこれまで中国湖南省邵陽県蔡橋郷の湘語方言について記述的研究を行ってきた（王振宇 2013 参照）。本年度より調査範囲をさらに邵陽県全域に広げることにした。邵陽県北部の岩口鋪鎮で方言調査を進める中、現地のインフォーマントから次の情報が寄せられた。岩口鋪鎮、長陽鋪鎮における一部の村落では高年者が二種類の方言を話せる。一つは周辺地域のことばに近い方言であるが、もう一つはそれとまったく異なったものであり、そこの村民同士でしか通じない方言である。後者は「平話」と呼ばれるという。この情報を裏付けるために、筆者は邵陽県方言の概略を記した『邵陽県志』を調べた。そこには「平話」の記述が見当たらなかったが、邵陽県北部の長陽鋪鎮における「咕瓦話」に関する簡単な紹介があった。以下に引用する（日本語訳は本稿筆者）。

……长阳铺的陆姓，罗姓，皇安寺的胡姓，屈姓，李姓等，至今说“看牛”为“况嗽”，管“学生”为“若勒”，管“讲话”为“咕瓦”，“睡觉”为“入雅闭里”，“吃早饭”为“且妈饭”。习称“咕瓦话”。

(…長陽鋪の陸家、羅家、および皇安寺の胡家、屈家、李家などは今でも「看牛」を「況嗽」、「学生」を「若勒」、「講話」を「咕瓦」、「睡覺」を「入雅閉里」、「吃早飯」を「且媽飯」のように発音する。この地域の方言は「咕瓦話」と呼ばれる。)

(『邵陽県志』: 587)

上に挙げられた「牛」=「嗽」、「講」=「咕」のような漢字音の混同は、他の邵陽県方言では観察されていない。たとえば、他の邵陽県方言では、「牛」の子音が[n]、[ŋ]などと発音され、「嗽」の子音のような軟口蓋鼻音[ŋ]にはならない。また、他の邵陽県方言で「講」の鼻音韻尾が[ŋ]か鼻母音として現れるのに対し、この方言の「講」は鼻音韻尾を持たない「咕」と同じ発音になっている。このように、長陽鋪鎮辺りの方言が周辺の邵陽県方言と大きく異なっていることが分かった。

この方言の全体的な特徴を明らかにするために、筆者は話者に頼み、フィールド調査を行った。現地の住民に方言の名前を確認したが、結局「平話」、「苗語」（ミャオ族のことば）しかなく、『邵陽県志』に記された「咕瓦話」の名前を聞いたことがないという。

「平話」といえば、広西省の東部に分布している漢語方言として知られている（図1参照）。中国漢語方言は一般、北方方言、湘語、呉語、客家語、贛語、粵語、閩語の7つに分けられる（袁家驊 1960）が、しかし、1987年出版の『中国語言地図集』はこれに平話、晋語、徽語を加え、「十大方言」の存在を主張する。

広西省の北東部は湖南省の西南部と境を接しており、平話の下位方言、「桂北平話」が湖南省南部に広く分布する「湘南土話」と深く関係している(鮑厚星 2002、詹伯慧 2007)。「湘南土話」は湖南省南部永州市、郴州市の各地に分布する「土話」、「七都話」、「六都話」などの総称であり、「寧遠平話」、「閩峽平話」のような「～平話」と名付けた「湘南土話」もある。その分布地域は図2の通りであり、地理的に最北の地点が永州市東安県とされている。東安県は北に邵陽県と境を接している。邵陽県の方言は湘語娄邵片(武邵小片)に属し、「湘南土話」や「平話」などの存在はこれまで報告されていない。果たして上述した邵陽県平話は「湘南土話」、「閩峽平話」などと同じ方言のグループに入るのか。この疑問を解決するために、第2節で子音、母音、声調をまとめ、第3節では中古音、「東安花橋土話」、「閩峽平話」などと比較しながら、邵陽県平話の音韻変化を考察する。

インフォーマントの基本情報は次のとおりである。性別:男。年齢:74歳。出身地:湖南省邵陽県岩口鋪鎮下馬石村。長期外出歴:なし。職業:農業。教育程度:小学校卒業。話せる言語:邵陽県平話、邵陽県湘語(邵陽市区方言に近い)。

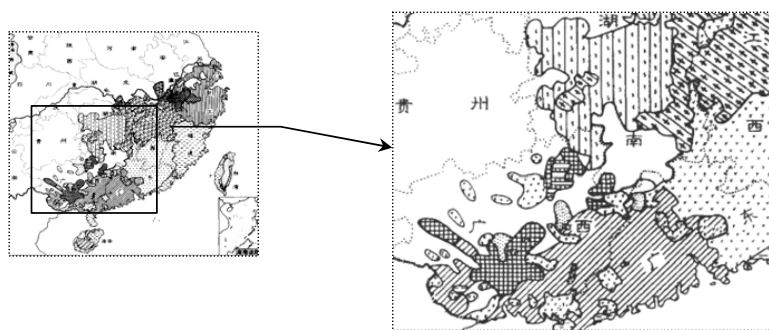


図1 平話の分布地域 (■で示した地域。游汝杰 (2004) より引用)

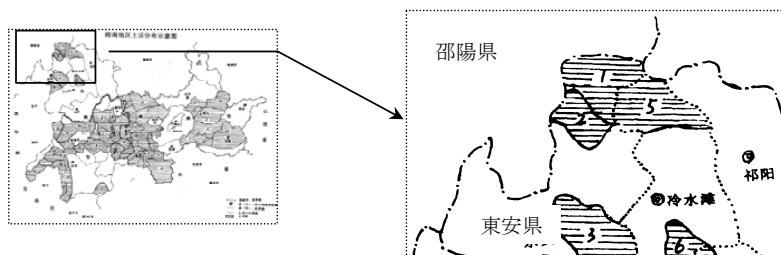


図2 湘南土話の分布地域 (罗昕如 (2004) をもとに作成)

## 2. 邵陽県平話の音韻体系

本節では、まず子音、母音、声調の順に、邵陽県平話の音韻をまとめる。次に周辺方言や中古音との比較の視点から邵陽県平話の一部の特徴的な音韻変化を考察する。

### 2.1 子音

邵陽県平話の声母は次のような26種類にまとめることができる。調音法については、摩擦音に [f, v]、[s, z]、[ç, ç]、[x, ɣ] のような無声音と有声音の2項対立が観察される。破裂音、破擦音には [p, pʰ, b]、[t, tʰ, d]、[k, kʰ, g]、[ts, tsʰ, ʈ]、[tɕ, tɕʰ, ʈɕ] のような無声無気音、無声有気音、有声音という3項対立が観察される。

表1 邵陽県平話の子音

	唇音	舌尖音	舌端音	舌面音	舌根音
破裂音 (例字)	p、p <sup>h</sup> 、b (八, 怕, 白)	t、t <sup>h</sup> 、d (店, 天, 停)			k、k <sup>h</sup> 、g (讲, 孔, 共)
摩擦音 (例字)	f、v (法, 问)		s、z (松, 事)	ɕ、ʒ (烧, 石)	x、ɣ (花, 红)
破擦音 (例字)			ts、ts <sup>h</sup> 、ɕ (早, 葱, 口 <sub>擦</sub> )	tɕ、tɕ <sup>h</sup> 、ɕ (砖, 抢, 晴)	
鼻音 (例字)	m (梅)	n (肉)			ŋ (鱼)

## 2.2 母音

母音は次のような25種類にまとめることができる。各韻母の下には4つの例字を挙げる。

表2 邵陽県平話の母音

介音 韻尾	開口呼	齊齒呼	合口呼	撮口呼
韻尾なし	ɿ (子, 做, 事, 十)	i (西, 鸡, 被, 细)	u (读, 火, 河, 粗)	y (雨, 水, 吹, 女)
	o (薄, 饱, 江, 霜)	io (抢, 粮, 羊, 长)		
	e (好, 桃, 到)	ie (天, 照, 晴, 八)		ye (远, 快, 砖, 船)
	a (眼, 鸭, 滩, 白, 山)	ia (夜, 踢, 石, 车)	ua (欢, 话, 看, 酸)	
韻尾-i、-u	ai (切, 节, 铁, 底)			
	ei (杯, 煤, 退, 雷)		uei (月, 盖, 开, 雪)	
	au (厚, 口, 楼, 愁)	iau (票, 招, 邵, 庙)		
		iəu (熟, 肉, 流, 酒)		
韻尾-n		in (音, 镜, 身, 认)		yn (春, 云, 军, 裙)
	en (本, 问, 能, 村)			
韻尾-ŋ	aŋ (生, 榜, 等, 冷)	iaŋ (萤, 榜, 等, 常)		
		iuŋ (用, 肿, 冲, 虫)	uŋ (东, 松, 孙, 寸)	

### 2.3 声調

声調は4つある(表3参照)。古上声字の声調は去声字の声調へと合流している。上声の調類を持たないことが声調の最も大きな特徴である。また、古入声字が独立した調類(33)として存在することは邵陽県東部方言、邵陽市区方言にも見られる特徴である。

表3 邵陽県平話の声調

調類	陰平	陽平	去声	入声
調値	55	22	214	33
(例字)	歌, 衣, 山, 鸡/ 肉, 命, 眼, 买	皮, 门, 停, 年, 前, 活, 茶, 床	大, 菜, 盖, 快/ 等, 锁, 酒, 口	切, 落, 法, 八/ 节, 铁, 鸭, 吃

### 3. 一部の特徴的な音韻変化

本節では、中古漢音や周辺方言との比較を通して、邵陽県平話の子音、母音、声調の特徴を考察する。

現代漢語の諸方言は一般的に、中古漢語(6~10世紀)から分裂してきたものであると考えられている。本節の中古漢音の音価については王力(1980)の推定音価による。

また、周辺方言との比較のために、東安花橋土話(鮑厚星 1998)、邵陽市区湘語(儲澤祥 1998)、蔡橋湘語(王振宇 2013)を用いる。關峽平話については詳しい同音字表がないため、例字を表に挙げないが、胡萍(2005, 2006)の分析結果を用いる。各地点の位置は図3のとおりである(右の地図は「Baidu 地図」をもとに作成)。

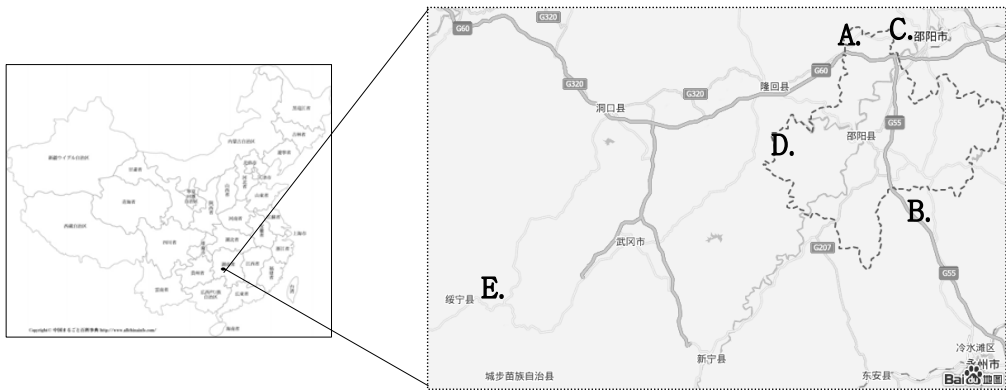


図3 各地点の位置

(A: 邵陽県岩口鋪鎮; B: 東安県花橋鎮; C: 邵陽市区; D: 邵陽県蔡橋郷; E: 綏寧県関峽郷)

#### 3.1 古有声音子音の保持

有声音子音と推定される古全濁声母は今日、北京語をはじめ、ほとんどの漢語方言で無声音化している。一方、一部の湘方言と呉方言では有声音がなお保たれている。

邵陽県平話の場合、古平・上・去声字では殆ど有声音子音として現れるが、入声字の一部は清音化される(表4参照)。ただし、古全濁入声字は周辺方言に比べ、より多くが有声音子音として現れる(表5参照)。表5の塗りつぶしに示すように、「学」、「石」の子音は周辺方言においては殆ど無声音化されているのに対し、なお有声音子音として保持されている。ただし、現在は北京語や周辺方言などの影響を受け、子音 [ʒ] の発音が不安定になりつつあり、話者によっては [z] を [ɛ] と発音する場合も観察されている。

表4 邵陽県平話における古全濁字の発音（古平・上・去声字）

全濁声母 (中古音)	定母 (*d <sup>h</sup> )	並母 (*b)	従母 (*dz)	澄母 (*q <sup>h</sup> )	崇母 (*dʒ <sup>h</sup> )	群母 (*g)	匣母 (*ɣ)	禅母 (*z)
例字	大	平	坐	重	柴	桥	厚	上
邵陽県平話	die <sup>214</sup>	bie <sup>22</sup>	dzo <sup>214</sup>	dziuŋ <sup>214</sup>	dzie <sup>22</sup>	dzie <sup>22</sup>	ɣau <sup>214</sup>	zio <sup>214</sup>
東安花橋土話	die <sup>24</sup>	bio <sup>13</sup>	dzo <sup>24</sup>	din <sup>55</sup>	dzai <sup>13</sup>	dzie <sup>13</sup>	ɣau <sup>24</sup>	ziũ <sup>55</sup>
邵陽市区湘語	da <sup>24</sup>	bin <sup>12</sup>	dzo <sup>24</sup>	dzuŋ <sup>24</sup>	dzai <sup>12</sup>	dziəu <sup>12</sup>	ɣəu <sup>24</sup>	zā <sup>24</sup>
蔡橋湘語	da <sup>13</sup>	bei <sup>11</sup>	dzo <sup>53</sup>	dziəŋ <sup>53</sup>	dza <sup>11</sup>	dziəu <sup>11</sup>	zy <sup>53</sup>	ziəŋ <sup>53</sup>

表5 邵陽県平話における古全濁字の発音（入声字）

全濁声母 (中古音)	定母 (*d <sup>h</sup> )	並母 (*b)	従母 (*dz)	澄母 (*q <sup>h</sup> )	匣母 (*ɣ)	禅母 (*z)
例字	读	白	昨	直	学	石
邵陽県平話	du <sup>214</sup>	ba <sup>214</sup>	dza <sup>214</sup>	dzi <sup>214</sup>	zio <sup>214</sup>	zia <sup>214</sup>
東安花橋土話	dəu <sup>42</sup>	bo <sup>42</sup>	zo <sup>55</sup>	dzi <sup>13</sup>	io <sup>13</sup>	zio <sup>42</sup>
邵陽市区湘語	du <sup>24</sup>	bə <sup>24</sup>	dzo <sup>24</sup>	ts <sup>h</sup> <sub>1</sub> <sup>24</sup>	ei <sup>33</sup>	sa <sup>35</sup>
蔡橋湘語	du <sup>13</sup>	p <sup>h</sup> a <sup>13</sup> / bie <sup>13</sup>	dzo <sup>13</sup>	dzɿ <sup>13</sup>	ei <sup>35</sup>	eiə <sup>35</sup>

### 3.2 中古鼻音韻尾の脱落

『広韻』では、韻母は韻尾が共通で主母音が近いか同じであるといった原則に沿って、大きく16のグループに分けられている。すなわち「十六撰」と呼ばれるものである。十六撰のうち、果撰、仮撰、蟹撰、効撰、流撰、遇撰、止撰はゼロ韻尾、もしくは母音韻尾を持つ開音節韻母のグループである。一方、咸撰、深撰、山撰、臻撰、宕撰、梗撰、江撰、通撰はいずれも子音韻尾を持つ韻母のグループである。これらの「撰」は鼻音韻尾（-m、-n、-ŋ）と入声韻尾（-p、-t、-k）の両方を持っている（表6参照）。

表6 十六撰

開口度	広い	果撰・仮撰	蟹撰	効撰	咸撰	山撰	宕撰・梗撰	江撰
	狭い		遇撰	止撰	流撰	深撰	臻撰	會撰
韻尾	舒声の場合	なし	-i	-u	-m	-n	-ŋ	-ŋ
	入声の場合	—	—	—	-p	-t	-k	-k

（注）「なし」は韻尾を持たないことをあらわす。「—」は当該の撰が入声を持たないことを表す。

邵陽県平話は入声韻尾を保持していない点で多くの湘語方言と同じである。また、多くの鼻音韻尾が脱落している点でも非常に特徴的である。本節は対象を開口度の広い「咸撰、山撰、宕撰、梗撰、江撰」に絞り、これらの「撰」に属する漢字の音韻変化について考察する。

まず、各方言における咸撰字、山撰字の発音について見る。咸撰、山撰韻母の韻類と中古推定音価は表7、表8のとおりである。両撰はそれぞれ韻尾 [m]、[n] を持ち、区別されていたが、近代になると、韻尾に [m] > [n] のような変化が起こって、両撰は合流した。

表7 咸摂の韻類

	一等	二等	三等	四等
開口	覃韻 (*ɔm)	咸韻 (*ɛm)	塩韻 (*iɛm)	添韻 (*iɛm)
	談韻 (*am)	銜韻 (*am)	嚴韻 (*iɛm)	
合口	なし	なし	凡韻 (*iɛwɛm)	塩韻 (*iɛm)

表8 山摂の韻類

	一等	二等	三等	四等
開口	寒韻 (*an)	山韻 (*æɳ)	元韻 (*iɛɳ)	仙韻 (*iɛɳ)
		刪韻 (*an)	仙韻 (*iɛɳ)	先韻 (*iɛɳ)
合口	桓韻 (*uan)	山韻 (*wæɳ)	元韻 (*iɛwɛɳ)	仙韻 (*iɛwɛɳ)
		刪韻 (*wan)	仙韻 (*iɛwɛɳ)	先韻 (*iɛwɛɳ)

咸摂字は、邵陽県平話の場合、鼻音韻尾が脱落し、単母音韻母となっている。東安花橋土話においても同じような変化が起きているが、一部の一二等字では、さらに主母音の高舌化が起きて [o] となっている。これらの方言に対して、邵陽市区湘語と蔡橋湘語ではいずれも鼻音韻尾が弱化しており、鼻母音となっている (表9、表10参照)。

表9 咸摂一二等字の発音

例字	喊	減	暗	胆	南	三	衫	淡	蚕	站
邵陽県平話	xa <sup>214</sup>	ka <sup>214</sup>	ŋa <sup>55</sup>	ta <sup>214</sup>	na <sup>22</sup>	sa <sup>55</sup>	sa <sup>55</sup>	da <sup>214</sup>	dza <sup>22</sup>	tsa <sup>214</sup>
東安花橋土話	xa <sup>55</sup>	ka <sup>55</sup>	ŋa <sup>35</sup>	to <sup>55</sup>	no <sup>13</sup>	so <sup>33</sup>	so <sup>33</sup>	do <sup>55</sup>	dzan <sup>13</sup>	tsan <sup>35</sup>
邵陽市区湘語	xã <sup>53</sup>	kã <sup>53</sup>	ŋã <sup>35</sup>	tã <sup>53</sup>	nã <sup>11</sup>	sã <sup>55</sup>	sã <sup>55</sup>	dã <sup>53</sup>	dza <sup>11</sup>	xã <sup>35</sup>
蔡橋湘語	xã <sup>53</sup>	kã <sup>53</sup>	ŋã <sup>35</sup>	tã <sup>53</sup>	nã <sup>11</sup>	sã <sup>55</sup>	sã <sup>55</sup>	dã <sup>53</sup>	dza <sup>11</sup>	xã <sup>35</sup>

表10 咸摂三四等字の発音

例字	閃	尖	盐	欠	甜
邵陽県平話	ɛie <sup>55</sup>	teie <sup>55</sup>	ie <sup>22</sup>	te <sup>h</sup> ie <sup>214</sup>	die <sup>22</sup>
東安花橋土話	ɛie <sup>55</sup>	teie <sup>33</sup>	ie <sup>13</sup>	te <sup>h</sup> ie <sup>35</sup>	die <sup>13</sup>
邵陽市区湘語	zã <sup>53</sup>	teie <sup>55</sup>	ziẽ <sup>12</sup>	te <sup>h</sup> ie <sup>35</sup>	diẽ <sup>12</sup>
蔡橋湘語	ɛie <sup>53</sup>	tɕi <sup>55</sup>	zi <sup>11</sup>	te <sup>h</sup> i <sup>13</sup>	di <sup>11</sup>

山摂字の発音について見る。表11に示すように、邵陽県平話の場合、山摂一二等字は上述した咸摂開口一二等と同様に、鼻音韻尾が脱落し、主母音が [a] となっている。東安花橋土話においては同様に、鼻音韻尾脱落の変化が観察されているが、合口一二等字に限って主母音が [ɛ] と高母音化されている。これらに対し、邵陽市区湘語と蔡橋湘語では鼻音韻尾が脱落して鼻母音として現れる (表8参照)。

表11 山摂一二等字の発音

例字	開口一二等						合口一二等字					
	寒	慢	眼	山	傘	炭	关	端	宽	酸	完	短
邵陽県平話	ɣa <sup>22</sup>	ma <sup>55</sup>	ŋa <sup>55</sup>	sa <sup>55</sup>	sa <sup>214</sup>	t <sup>h</sup> a <sup>214</sup>	kua <sup>55</sup>	tua <sup>55</sup>	k <sup>h</sup> ua <sup>55</sup>	sua <sup>55</sup>	ua <sup>22</sup>	tua <sup>214</sup>

例字	開口一二等						合口一二等字					
	寒	慢	眼	山	傘	炭	关	端	宽	酸	完	短
東安花橋土話	yan <sup>13</sup>	ma <sup>35</sup>	ŋa <sup>55</sup>	sa <sup>33</sup>	sa <sup>55</sup>	tʰa <sup>35</sup>	xua <sup>33</sup>	tue <sup>33</sup>	kʰue <sup>33</sup>	sue <sup>33</sup>	ye <sup>13</sup>	tue <sup>55</sup>
邵陽市区湘語	ɣä <sup>12</sup>	mã <sup>35</sup>	ŋã <sup>42</sup>	sã <sup>55</sup>	sã <sup>42</sup>	tʰã <sup>24</sup>	kuã <sup>55</sup>	tuã <sup>55</sup>	kʰuã <sup>55</sup>	suã <sup>55</sup>	zyẽ <sup>12</sup>	tuã <sup>42</sup>
蔡橋湘語	ɣä <sup>11</sup>	mã <sup>55</sup>	ŋã <sup>53</sup>	sã <sup>55</sup>	sã <sup>53</sup>	tʰã <sup>13</sup>	kũ <sup>55</sup>	tũ <sup>55</sup>	kʰũ <sup>55</sup>	sũ <sup>55</sup>	zye <sup>11</sup>	tũ <sup>53</sup>

山撰三四等字の発音については、邵陽県平話は東安花橋土話と殆ど同じように、鼻音韻尾脱落の変化を成し遂げている。蔡橋湘語は合口三四等字に限って鼻音韻尾の脱落が観察されているが、開口三四等字については邵陽市区の開口、合口三四等字と同様に鼻母音となっている（表 12 参照）。

表12 山撰三四等字の発音

例字	開口三四等						合口三四等字					
	棉	钱	剪	田	前	片	元	砖	远	船	劝	选
邵陽県平話	mie <sup>22</sup>	dzie <sup>22</sup>	teie <sup>214</sup>	die <sup>22</sup>	dzie <sup>22</sup>	pʰie <sup>214</sup>	ye <sup>22</sup>	teye <sup>55</sup>	ye <sup>55</sup>	dzye <sup>22</sup>	teʰye <sup>214</sup>	eye <sup>214</sup>
東安花橋土話	mie <sup>13</sup>	zie <sup>13</sup>	teie <sup>55</sup>	die <sup>13</sup>	zie <sup>13</sup>	pʰie <sup>35</sup>	yẽ <sup>33</sup>	teyẽ <sup>33</sup>	yẽ <sup>55</sup>	dzye <sup>13</sup>	teʰye <sup>35</sup>	eye <sup>55</sup>
邵陽市区湘語	miẽ <sup>12</sup>	dziẽ <sup>12</sup>	teiẽ <sup>42</sup>	diẽ <sup>22</sup>	dziẽ <sup>22</sup>	pʰiẽ <sup>24</sup>	zyẽ <sup>12</sup>	teyẽ <sup>55</sup>	yẽ <sup>42</sup>	dzyẽ <sup>12</sup>	teʰyẽ <sup>24</sup>	eyẽ <sup>42</sup>
蔡橋湘語	mĩ <sup>11</sup>	dzi <sup>11</sup>	tsĩ <sup>53</sup>	dĩ <sup>11</sup>	dzi <sup>11</sup>	pʰĩ <sup>214</sup>	zye <sup>11</sup>	teye <sup>55</sup>	ye <sup>53</sup>	dzye <sup>11</sup>	teʰye <sup>13</sup>	syẽ <sup>53</sup>

また、邵陽県平話と同じ「平話」の呼び名を持つ「閩峽平話」がある。閩峽平話の咸撰字、山撰字は胡萍（2005, 2006）によると、次のような母音を持つという。閩峽平話は鼻音韻尾脱落の点で邵陽県平話、東安花橋土話と同じ変化の経路を持つ。一二等字で起きた母音の高舌化（\*a>o）については東安花橋土話（\*a>o、\*a>e）と同じであるが、邵陽県平話と異なっている。

- ① 咸撰一二等字の主母音： [o] 蚕，男，胆，担，蓝，三，喊，杉，咸； [ou] 含
- ② 咸撰三四等字の母音： [ɛ] 尖，签，甜，点； [ie] 盐，剑
- ③ 山撰一二等字の母音： [o] 单，难，看，汗，散，烂，端，绊； [u] 官，碗； [ou] 舛，酸，算，蒜，断
- ④ 山撰三四等字の母音： [ɛ] 煎，钱，剪，线，鲜，天，田，典，先； [ie] 缠，燃，扇，见，烟；  
[ye] 拳，船，串，渊

さらに、宕撰字の発音について見てみる。邵陽県平話では、鼻音韻尾が脱落し、主母音が [o] となっている。これに対し、蔡橋湘語方言は音韻変化に最も保守的であり、[ŋ] 韻尾を保持している。東安花橋土話と邵陽市区湘語は一部で鼻音韻尾が脱落しているものの、鼻母音として現れており、邵陽県平話と蔡橋方言との間の段階に位置づけられる（表 13 参照）。また、閩峽平話の宕撰字は母音が [(i)ou]、[u] となっており、邵陽県平話と近い関係にある。

表13 宕撰字の発音

例字	汤	糖	娘	量 (動詞)	枪	抢	墙	像
邵陽県平話	tʰo <sup>55</sup>	do <sup>22</sup>	nio <sup>22</sup>	nio <sup>22</sup>	teʰio <sup>55</sup>	teʰio <sup>214</sup>	dzio <sup>22</sup>	dzio <sup>214</sup>
東安花橋土話	tʰuŋ <sup>33</sup>	duŋ <sup>13</sup>	ŋiũ <sup>13</sup>	ŋiũ <sup>13</sup>	teʰiũ <sup>33</sup>	teʰiũ <sup>55</sup>	dziũ <sup>13</sup>	dziũ <sup>35</sup>
邵陽市区湘語	tʰã <sup>55</sup>	dã <sup>12</sup>	niã <sup>12</sup>	niã <sup>12</sup>	teʰiã <sup>55</sup>	teʰiã <sup>42</sup>	dziã <sup>12</sup>	dziã <sup>24</sup>
蔡橋湘語	tʰaŋ <sup>55</sup>	daŋ <sup>11</sup>	niaŋ <sup>11</sup>	niaŋ <sup>11</sup>	tsʰiaŋ <sup>55</sup>	tsʰiaŋ <sup>53</sup>	dziaŋ <sup>11</sup>	dziaŋ <sup>13</sup>

また、江撰字の場合も同様に、邵陽県平話は他の方言に比べると変化が最も大きく、すべての字の鼻音韻尾が脱落している(表14参照)。東安花橋土話の一部、邵陽市区方言、蔡橋方言では、古鼻音韻尾が鼻音韻尾または鼻母音として発音される。また、関峽平話は江撰二等字の母音が [ou] となっており、邵陽県平話と近い関係にある。

表14 江撰字の発音

例字	江	讲	撞	双	窗
邵陽県平話	ko <sup>55</sup>	ku <sup>214</sup>	ts <sup>h</sup> ua <sup>214</sup>	sua <sup>55</sup>	ts <sup>h</sup> ua <sup>55</sup>
東安花橋土話	ko <sup>33</sup>	ko <sup>55</sup>	dzuŋ <sup>55</sup>	suŋ <sup>33</sup>	ts <sup>h</sup> uŋ <sup>33</sup>
邵陽市区湘語	teiã <sup>55</sup>	kã <sup>42</sup>	dzuã <sup>24</sup>	suã <sup>55</sup>	ts <sup>h</sup> uã <sup>55</sup>
蔡橋湘語	kaŋ <sup>55</sup>	kaŋ <sup>53</sup>	dzaŋ <sup>13</sup>	sũ <sup>55</sup>	ts <sup>h</sup> aŋ <sup>55</sup>

最後に、梗撰字の鼻音韻尾脱落について見てみる。邵陽県平話の場合、二等字が鼻音韻尾 [ŋ] を保持しているが、三四等字では鼻音韻尾脱落の変化が起きて、主母音が [e] となっている。東安花橋土話では、二等字、三四等字に関わらず、殆どで韻尾 [ŋ] が脱落し、主母音が [o] となっている。関峽平話は次のように二等字と三四等字の発音が邵陽県平話に近い。これらに対し、邵陽市区方言と蔡橋方言では、鼻音韻尾が保持されている(表15参照)。

- ② (関峽平話) 梗撰二等字の母音: [aŋ] 冷, 生, 坑, 硬
- ② (関峽平話) 梗撰三四等字の母音: [ɛ] 井, 晴, 颈, 姓, 星, 病, 釘, 零, 青

表15 梗撰字の発音

例字	二等字				三四等字					
	硬	生	冷	争	平	命	晴	青	腥	釘 (名詞)
邵陽県平話	ŋaŋ <sup>55</sup>	saŋ <sup>55</sup>	naŋ <sup>55</sup>	tsaŋ <sup>55</sup>	bie <sup>22</sup>	mie <sup>55</sup>	dzie <sup>22</sup>	te <sup>h</sup> ie <sup>55</sup>	cie <sup>55</sup>	tie <sup>55</sup>
東安花橋土話	ŋaŋ <sup>35</sup>	so <sup>33</sup>	lo <sup>55</sup>	tso <sup>33</sup>	bio <sup>13</sup>	mio <sup>35</sup>	zio <sup>13</sup>	te <sup>h</sup> io <sup>33</sup>	eio <sup>33</sup>	tio <sup>33</sup>
邵陽市区湘語	ŋən <sup>35</sup>	sən <sup>42</sup>	nən <sup>42</sup>	tsən <sup>55</sup>	bin <sup>12</sup>	min <sup>35</sup>	dzin <sup>12</sup>	te <sup>h</sup> in <sup>55</sup>	ein <sup>55</sup>	tin <sup>55</sup>
蔡橋湘語	ŋaŋ <sup>55</sup>	saŋ <sup>55</sup>	naŋ <sup>53</sup>	tsaŋ <sup>55</sup>	biaŋ <sup>11</sup>	miaŋ <sup>55</sup>	dziaŋ <sup>11</sup>	ts <sup>h</sup> iaŋ <sup>55</sup>	siaŋ <sup>55</sup>	tiaŋ <sup>55</sup>

以上、邵陽県平話、東安花橋土話、邵陽市区湘語、蔡橋湘語、関峽平話を比較してきた。邵陽県平話、東安花橋土話、関峽平話は同じ鼻音韻尾脱落の変化を辿り、邵陽市区、蔡橋の湘語方言と異なっている。また、東安花橋土話は邵陽県平話、関峽平話に比べ、主母音の高舌化がさらに進んでいる。

### 3. おわりに

本稿では、邵陽県平話の音韻に関するいくつかの特徴を上げて考察した。鼻音韻尾脱落などの変化において東安花橋の「湘南土話」や綏寧関峽の「関峽平話」と同じ経路をたどったことが分かった。一方、湘語方言から大きな影響を受け、無声音子音の保持や入声調の保持などの点で邵陽市区方言と同じ特徴を持っている。この方言は周辺のことばから大きく異なっているため、「苗語」(ミャオ族のことば)だと言われたこともあるが、中古漢音との対応関係から見ると、漢語方言の一つのバリエーションであることが分かった。また、鼻音韻尾の脱落などの音韻変化の経路から見ると、邵陽市区と蔡橋の湘語方言に比べ、「東安花橋土話」、「関峽平話」により近い関係にあり、後者のグループに入れるのが適切だと考える。本稿は邵陽県平話の初歩的研究として対象を一部の音韻特徴に絞って考察した。今後の課題としては音韻、語彙、文法の記述的研究をさらに進めてこの方言の全体像を明らかにしたい。



### 参考文献

- 鲍厚星 (1998) 《东安土话研究》.湖南教育出版社.
- 鲍厚星 (2002) 《湘南东安型土话的系属》.《方言》2002 (3) .
- 鲍厚星 (2004) 《湘南土话系属问题》.《方言》2004 (4)
- 储泽祥 (1998) 《邵阳方言研究》.湖南教育出版社.
- 胡萍 (2005) 《试论绥宁“关峡平话”的系属》.《邵阳学院学报(社会科学版)》.
- 胡萍 (2006) 《绥宁(关峡)苗族“平话”的语音特点》.《湘潭师范学院学报(社会科学版)》第28卷第1期.
- 罗昕如 (2004) 《湘南土话词汇研究》.中国社会科学出版社.
- 邵阳县志编纂委员会编 (1993) 《邵阳县志》.社会科学文献出版社.
- 王福堂 (2001) 《平话、湘南土话和粤北土话的归属》.《方言》2001 (2) .
- 袁家骅 (1960) 《汉语方言概要》.北京文字改革出版社.
- 游汝杰 (2004) 《汉语方言学教程》.上海教育出版社.
- 詹伯慧 (2001) 《广西“平话”问题刍议》.《语言研究》2001 (2) .
- 詹伯慧 (2007) 《对“平话”问题的再认识》.《贺州学院学报》第23卷第1期.
- 中国社会科学院·澳大利亚人文科学院合编 (1987-1989) 《中国语言地图集》.香港:朗文出版公司.
- 王振宇 (2009) 「湘語蔡橋方言の音韻体系」『ポリグロシヤ 言語と言語教育—アジア太平洋の声』第17卷.立命館アジア太平洋研究センター.
- 王振宇 (2013) 『湘語蔡橋方言の研究』.好文出版.

### 付記

本稿は日本学術振興会の科学研究費補助金による若手研究(B)「中国湘語邵陽県方言の記述的研究」(課題番号:26770152、研究代表者:王振宇)の研究成果の一部である。

